
俺の居場所

j

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の居場所

【Nコード】

N6832F

【作者名】

j

【あらすじ】

小さい時から、必要とされてない主人公【かなめ】は自分にだんだん、苛立ちや、恐怖におびえ初めた。人間の怖さと、人間の弱さがわかる小説です。

空気。

小さい頃、俺は誰からも相手にされず、あげくのはてに
「あんたなんて、死んじゃえばいい」

と幼なじみの女の子に言われた。
その瞬間、俺の心はサビついてしまっていた。

誰からも相手にされない自分にいらだった。泣き叫んだ。

でも、そんな俺に手をさしのべてくれる人なんて、一人もいなかった。

俺の居場所はなくなっていた。

親も、兄貴も、全員俺を空気のように思っていた。

あってもなくてもいいもの。

俺一人いなくなっても何も変わらないんだ。

その空気扱いされる俺を皆でけむたがった。

どこかに行けと言ってるような視線が心に突き刺さっていた。

俺が15になっても、皆で俺をまだけむたがり、もちろん、中学にも行かせてもらえなかった。

まあ、まるで、生きている意味のない俺を誰も相手にしてくれるはずがない。

そして、とうとう俺は、自殺を決意した。

今度産まれて来るときは、きっと人気者で、皆から必要とされながら、生きる。

そう思い、ナイフを手首にあてた。

ぐっと、力を入れてナイフをつきたてると、兄がいきなり走って、俺の方に来た。

「かなめ！お前、リストカットしようとしてるのか！？」

「うん・・・。」

「やめろ、かなめ！お前が死んだら、次は俺がお前みたいになっちゃうんだよ。」

俺はあまりにも、憎しみの感情が出てきて、あぜんとしていた。

「まあ、リストカットお前やめたみたいだし、もういいや。」

と言って、兄はその場をはなれた。

俺は、本当にリストカットをやめて、外に出た。

ふと、前を見ると、髪の高い女の子がこっちを見ていた。自分と同じくらいの年だろう。

そしてその子は俺に、

「かなめ・・・くん？」

と言った。

その子は小さい時、俺に死んじゃえと言った、幼なじみの女の子だった。

怖くて痛々しい思い出が、じわじわと心の中でよみがえってきていた。

「しゅうな・・・ちゃん・・・。」

「やっぱりかなめくんだー！久しぶり！」

「うん。」

俺は怖くて、小さく返事した。

なぜかと言うと、しゅうなちゃんが、俺を苦しめた、一番最初の人間だった。

もし、俺がしゅうなちゃんに出会ってなければ、俺はこんな苦しまず、普通の人間になっていたはずだ。

それは、俺が六歳の時にさかのぼる・・・。

傷つけた者傷ついた者。

「かなめくん、あの時は、ごめんー。」

しゅうなちゃんは軽く謝ったが、俺が受けた傷はそんなに軽い物なんかじゃなかった。

しかし、まだあの時の恐怖が残っていたので、俺はしゅうなちゃんに本音をぶつける事ができなかった。

「まあ、過去の事は忘れて仲良くしようよ。」

しゅうなちゃんは、俺に手をさしのべてくれた。

俺は、不覚にも、その手をとってしまった。

俺は・・・けがれている。昔、俺を恐怖の穴に突き落とした女の子の手をとってしまって。

本当は、今度は俺が、しゅうなちゃんを恐怖に怯えさせて、居場所を奪って、悲しませてやると決めたはずなのに。

俺には、そんな勇気1つだせなかった。

結局俺は、誰かが俺のそばに居たって、一人だって、変わらない。何も出来ないんだ。

次の日から、しゅうなちゃんからよくメールが来るようになった。俺は、馬鹿な奴だから素直に返信した。しゅうなちゃんを傷つけない

いように。

俺はだんだん、変われるのかもしれないと、思ってしまった。

しゅうなちゃんは傷つけた者、俺は傷ついた者、それぞれ、違う過去を持つ者同士が、メールだなんて、たかがしれてる。

しかし、楽しくてしょうがなかった。

人とのメールが楽しくて、しょうがなかったんだ。
人とメールが初めてだったから。

俺はだんだんと、昔の思い出が消えていった。

しかし、次の日から、突然、しゅうなちゃんからのメールがパツタリと、止まった。

もう生きていく事はできない。

なぜしゅうなちゃんからメールが止まったのかは分からない。

しかし1つは分かっている。

飽きられた

それは確かだと、自分でも思う。

その次の日から知らないアドレスから嫌がらせメールが大量に來た。

『死ね』や『地獄に落ちろ』などが大量に。

それは、たぶんしゅうなちゃんだ。

また俺は裏切られた。

俺の心は、ズタズタに引き裂かれた。

悲しくて、苦しくて、生きている意味をなくしてしまった。

俺には生きる資格がないのだろうか。

ただはいつくばって生きているだけでもいけないのだろうか？

俺はいつまで一人なのだろうか、
ずっと？ 一生？ 永遠？

もう、俺は疲れてしまったんだ。

この世界に。

ふいに手をポケットに入れるとナイフがはいっていた。

リストカットしようとして、結局しなかった時に使ったナイフだった。

俺はそれを手に取って、強く握りしめた。

もちろん、刃の方を握りしめた。

それは確かに痛かった。すごく痛かった。

リストカットはこのいたみ以上に痛いだろう。

血が手の中からあふれだす。その血はどんどん、下に落ちていく。

俺は下に落ちていく血のようだ。

皆は血を嫌う。そして、血は下に落ちていく。

まったく俺そのものだ。

俺の手からもまだ血は落ちている。

まわりの人は俺を見て、すごく嫌そうな顔をして通り過ぎていく。

もう辛いんだ。もう怖いんだ。もう疲れたんだ。もうたえられないんだ。

もう・・・この世界で生きていく事はできないんだ。

俺はその時、本当にリストカットを決意した。

でも、こんな街で死ぬのは嫌だと思い、違う場所へ移動しはじめた。

光る崖・黒い夢。

それから俺は15分ぐらい歩いた。

ずっとまっすぐ進んで行った。

そして、しげみのような中から出ると、今まで見たこともないほど、美しい景色があった。

花が所々に咲き、街すべて見渡せる崖があった。

こんなに美しい景色を見たのは初めてだった。

「俺は、こんな所で死ねて、幸せだな。最初で・・・最後の幸せか・・・。ふっ、これが、喜びとかゆう感情か。」

そして俺はどうとうナイフを出して手首にあてた。
ゆっくり力を入れた。

「スー」

力を入れてゆっくり手首を切った。
俺は後ろに倒れた。

痛かったが、楽になれた気がした。

そして少しずつ力が抜けていった。

目を開ける力もなくなっていた。

それから俺はゆっくりと目を閉じた。

手首からは血があふれだし、心臓の鼓動も早くなっていた。

「お、俺は、楽に・・・なれ、るんだ・・・。」

喋る力もなくなった俺はゆっくり口を閉じた。

俺は夢を見た。

皆、俺に笑いかけて、いろんな話を聞かせてくれて。

とても幸せだ、これまでにない程、幸せ。

本当に俺は死んだんだ。

ここは、痛みも、悲しみもない世界のはずなのに、なぜか、心も、ナイフで切った手首も痛かった。

痛くて、痛くて、うずくまっていたら、しゅうなちゃんがでてきた。

「死んじゃえ。」

ずっとそう言うんだ。

まだ俺を苦しめるんだ。

まだ、俺は・・・、生きているのか？

死んでは・・・、いないのか？

少女の過去・少年の傷。

そう思うとまた怖くなってきた。

しかし、かすかに

「あの、大丈夫ですか？」

と、女の子の声が耳元から聞こえてきた。

俺は飛び起きた。

《ズキン》

と左手首に激しい痛みがはしる。

見ると、ていねいに包帯が巻いてあった。

俺は生きていた。

死んではいなかった。

そして、目の前には、自分と同じぐらいの年とおもう女の子が一人心配そうに俺を見ていた。

「え、君が俺を助けてくれたのか？」

「あっ、はい。」

俺はありがとうとは言えなかった。

「私、あなたの事してました。」

「ああ、まだ俺の貼り紙が残ってたか。」

「あなたは、私と同じだから、助けないほうが幸せかと思ったのですが……。」

「えっ！？君が俺と同じ？」

「はい。私も、一人なんですよ。両親は私を捨ててどこかに行って、しんせきにもたらいまわしにされて、一人で生きていく事を決意して、今まで一人だったんです。」

「じゃあ君も辛かったんだ。」

「そう……ですね。」

「そっか……。」

「でも、同じなのはそれだけじゃないですよ。」

その女の子は、黒いリストバンドをした手を前にだして、リストバンドをはずした。

俺は驚いた。

その女の子の手首には、俺と同じ、リストカットした傷跡があった。しかし、その女の子の手首の傷は俺よりも大きくて、深い傷跡だった。

「私も、皆から嫌われていたんです。」

皆、私をさけて、嫌って、無視して、何回も死ねって言うんです。私が何をしたって言うんですか！？なんにも・・・してないのに。」

また、傷跡をリストバンドで隠して、その女の子は言った。

「この手首は2回切ったんです。」

1回目は、私を嫌ってる人が、いきなりナイフで傷つけてきました。2回目は、この世界が嫌になって、自分でつけました。」

「2回も！？痛かったでしょ？」

「痛かったですけど、この世界で作った心の傷よりはいたくなくなかったです。」

でも、死ねなかったんです。楽になれなかったです。」

リストバンド。

その女の子は、泣きながらくやしそうな顔をした。

「なんで死ねないの!?!なんで生きなきゃいけないの!?!もう、こんな世界嫌なんですよ!」

その子は俺とまったく同じだった。

「ねえ、君、名前なんてゆうの?」

「私は、ゆなっぺいいます。」

「ゆなちゃん、よろしく。俺はかなめ。」

「かなめさん、よろしくお願いします。」

「俺ね、こうやって心を許して人と喋るの初めてなんだ。」

「私もです。こんなにも喋る事が楽しいって思うのは久しぶりです。」

俺は、この子となら仲良くなれるとすぐ思った。

「俺たち、本当に似てるよな。」

俺は笑ってそう言った。

「はい。」

ゆなちゃんも笑ってそう言った。

その時いきなり俺のメールの着信音が鳴った。

見ると、それはしゅうなちゃんからだった。

《かなめくん、久しぶりだね。これからちょっと話たい事があるから、私の家の前に来てくれる？ 急いでね。》

「ごめん、ゆなちゃんちょっと用事ができちゃって。もう行くね。」

「あつ、かなめさん、ちょっと待って下さい。」

ゆなちゃんは、俺の方に来て、おそろいのリストバンドをつけてくれた。

「これで傷は見えません。」

ゆなちゃんはニコツと笑った。

「ありがとう。」

俺は笑ってそう言うのと、手を軽くふってゆなちゃんの家を出た。

そして、急いで走ってしゅうなちゃんの家をめざした。
ほんの少しだけ、俺の心には恐怖心があった。

初めての怒り、酷いおどし。

そして俺はやっと、しゅうなちゃんの家の前についた。

「何？しゅうなちゃん。」

「あー。その態度むかつく。前まではびくびく、びびってたくせにさ。」

俺はその時すごく怖くなった。

「まあいいわ。あんた、リストカットしたでしょ？」

俺は驚いた。なぜしゅうなちゃんがそれを知っているのかと。

「な、なんで、しゅ、しゅうなちゃんが!？」

「別になんだって、いいじゃない。」

しゅうなちゃんは俺をあざ笑うようにこう言った。

「そんなの、リストバンドを見れば分かるし、それ、ゆなにもらったんでしょ？」

「なんで、ゆなちゃんを知ってるんだ!？」

「なんでって、一番最初にゆなをいじめたのは、私だし、あいつにリストカットしてやったのも私だから。」

俺は、何かおさえきれない感情がこみあげてきていた。

「そんなの・・・、酷すぎる。」

「は？私はいつの手伝いしただけだし、『これ以上、私が苦しむだけなら殺して』とか言うから、リストカットしてやった。それだけ。」

「それは、しゅうなちゃんがいじめたから。」

「かなめくん、あんた、あんま調子にのんなよ。今度私に口だし、したら、あんたも、ゆなとおんなじめにあわすから。」

俺は、おどされた。

自分より背が小さい、しかも女の子に。なんて、俺は弱いのだろう。自分も他人も守れない。

ああ、俺はなんて、ちっぽけな男なのだろう。

そんな俺がなさけなく見えた。

残酷な思い出。

俺は、なんて汚い男なのだろうか。自分を守る事に必死で。
おどされて、怯えて。俺は本当に弱い男だ。

そんな事を思いながら、ふらふらとどこかに歩いて行くと、ゆなちやんが、前から走って来た。

「かなめさん。あの、しゅうなちゃんと、仲良しなんですか？」

ゆなちゃんは不安そうに言った。

「あの会話、見てたんだ。」

「すみません。見てしまいました。」

「俺、しゅうなちゃんと仲良くないよ。」

「よかったです。」

「ゆなちゃん、辛かったんだね。」

「でも、殺してはおおげさですよね？」

ゆなちゃんは、無理して笑った。

「俺だって、ゆなちゃんの立場だったら殺してって言ってるよ！」

なぜかムキになってしまった。

「ありがとうございます。」

ゆなちゃんは、にっこり笑ってそう言った。

「だって、俺と同じだから……。」

「はい？」

「俺も、そんな過去があっただよ。」

「話して……くれますか？」

「うん……、いいよ、ゆなちゃんも話してくれたからさ。」

「すみません。ありがとうございます。」

「俺、小さい頃、しゅうなちゃんと幼なじみでさ、しゅうなちゃんが盗んできたもの、返してきてくれて言われて、そっと、物を置いたら、捕まっちゃってさ、警察行って、帰ってきたら、しゅうなちゃんがさ『なんで帰って来るの？少年院に入るかと思ったのに、私はあんたが大嫌いな、あんたなんか死んじゃえ。』ってね、その後から、酷い嫌がらせばかりやられて、変な貼り紙ばかりはられたんだよ。」

「だからあの時、【俺の貼り紙が残ってたのかっ】って言ったんですね。」

作り笑顔・なぐさめ。

「うん……。」

「でも、本当に私と同じですね。だから、かなめさんの辛さは、私が一番わかります。なので、胸をはって、生きてください。笑ってください。私みたいに、バカみたいに生きましょう。」

その時、ゆなちゃんになぐさめられた俺は、心が少しだけ、軽くなつた気がした。

「ゆなちゃん、ありがとう。ゆなちゃんはすごいよ。」

「そうですか？ 私は、ずるい人間ですから。」

「えっ？ ずるい人間？ どういう意味？」

「私はわがままで、神様にばかり、お願いしてますから。神様がいなきゃ何もできないんです。」

ゆなちゃんは無理して笑った。

「ねえ、無理ばっかしなくていいんじゃない？」

それとさ、ゆなちゃんはずるくないし、わがままでもないと思うよ。神様がいてもいなくても、ゆなちゃんは今と同じ生活、今と同じ事

をしてたでしょ？」

「かなめさん・・・、ありがとうございます・・・。」

「無理ばっかしてると、神様、助けられなくなっちゃうよ？」

「はいっ。」

ゆなちゃんはおもいきり笑ったみたいに見えた。

それから、俺とゆなちゃんはぶらぶら歩いた。

何かを見つけたりしたわけでもなかった。

ただ、ゆなちゃんのおもいきりの笑顔が何回も見れた。

ゆなちゃんの笑顔は、懐かしい感じがした。

しばらくすると、突然、ゆなちゃんが、ガクガク震えだした。

「えっ？ ゆなちゃん？ どしたの？」

ゆなちゃんの見ている方向を見て、そこにいたのは、しゅうなちゃんだった。

大切な人を守る気持ち。

「あれー、二人とも、きぐうね。」

しゅうなちゃんはわざとらしく言った。

俺は勇気を出して言ってみた。

「うん、本当にきぐうだね。」

「ゆな、あんたは何か言うことないの!？」

「ご、ご、ごめんなさい。本当にきぐうですね、しゅうなちゃん。」

ゆなちゃんは、すごくビクビクしていた。汗もいっぱいいていた。

「ねえゆな、あんたリストカットまたしたの？バカよね。」

しゅうなちゃんがゆなちゃんのリストバンドをはずして、手首をみた。

ゆなちゃんは、泣いていた。リストバンドを取り返すそぶりもなく、何も出来ずに、ずっと泣いていた。

それなのに、俺は何も出来ない。ただ、じっと見てるだけ。

俺に、生きる楽しさを教えてくれた、大切な人がそばで泣いているのに。

しかし、突然ゆなちゃんが小さな声で

「や、めてくだ、さい。」

と言った。俺は驚いた。

「はあ？ ゆな、誰に言ってると思ってるの？」

「しゅ、しゅうなちゃんです・・・リストバンド、返してください！
お願いします。」

「なっ、ゆなが私にくちごたえするなんて、またリストカットして
ほしいの！？」

俺は、押さえられなくなり、つい、口を出してしまった。

「しゅうなちゃん、もうやめなよ。」

「あんたまでっ！？」

「俺だって人間だ！ くちごたえだってする。俺は・・・俺とゆなち
ゃんは、もう一人じゃないんだ！ ちゃんと、ここに居場所があるん
だ！」

しゅうなちゃんは、口を開けたまま、俺を驚いたようにじっと見て
いた。

暗い真実。

「あんたたち、覚えてなさいよ！」

しゅうなちゃんは、焦りながら走って行った。

すると、ゆなちゃんは、気が抜けたように、肩をがくんと落として、声をあげて泣いた。

「うっうっうう、うあああん！」

「ゆなちゃん、泣いちゃだめだよ。大丈夫、大丈夫、俺たちは、死ぬただけに、生まれてきたんじゃない。誰かを、何かを見つけるために生まれてきたんだ。だから、笑って何かを見つけよう。」

「でも、私は見つけましたよ。何千万もいる人の中から、たった1人、かなめさんを見つけました。」

「俺も、ゆなちゃんを見つけた。だから俺、今とっても楽しいし、幸せなんだ。だから、笑えるんだ。」

「私も、幸せです。だからもう、泣きません。約束です。」

ゆなちゃんは、俺のおでこにゆなちゃんのおでこをくっつけた。

「これが指切りのかわりです。」

「うん、わかった、じゃあ約束。」

俺たちは、笑い合った、ずっと。

「でも、気になるのは、しゅうなちゃ・・・いや、しゅうなだ。何をしてくるかわからない。」

「はい、いったい、何をしてくるかですね。でも、知ってましたか？ しゅうなちゃん、親がいないんですよ。」

「えっ?! 親がいない?! どういう事?。」

「しゅうなちゃんの親は、しゅうなちゃんが5歳のとき、ある、小さいな事が原因で、殺し合ったんです。しゅうなちゃんはまだ、小さかったので、どうすることも出来なかったんです。だから、親の愛を受けずに生きてきたんです。」

五歳・少女の悲痛な叫び。

「結局しゅうなちゃんは、私達と同じ、居場所が欲しかっただけなのかもしれません。誰かに、そばにいてほしかっただけなのかもしれません。」

「でも俺はしゅうなのしたことが、どうしても許せないんだ。たとえば、どんな理由があったとしても。」

俺は変わっていた。昔とは全然違う。前までは、脅えて、恐怖におぼれて……。

でも、守りたい人が出来た今、俺は変わったんだ。

「それで、かなめさんが許せない事とはなんですか？」

「俺をこんなにした事も許せないけど、ゆなちゃんにリストカットした事はもっと許せないんだ。」

だって、切られてるところがもっと深かったら、ゆなちゃんは死んでいた。

人の命を奪うような事しちゃいけないんだ。」

「しゅうなちゃん、親にリストカットされたんですよ……。」

「え……。」

その瞬間、俺は氷ついた。

「しゅうなちゃんが五歳の時ですよ。とても痛かったでしょうね。」

〈10年前〉《しゅうな五歳》

「お母さん。お腹すいた。」

「うるさい！あっちにいきなっ！」

「うっうっ、お母さん！お腹すいた！お腹すいた！」

「うるさいって言うてるだろ！いい加減黙れ！」

「お母さん……。」

「そうだ、しゅうな、こっちにおいで。
手首を出して。」

「えっ！何？何か食べさせてくれるの？」

しゅうなが、手を出したとき、しゅうなの母親は、そっと、机の上に置いてあるナイフを手を取った。

「それは・・・、これよ！」

しゅうなの母親は、勢いよく、しゅうなの手首をすっぱりと切った。

「あ、あ、手が！手がああああ！血が出てるよお！痛いよおおお！」

そのまま母親はずっと笑っていた。

おかしくなった俺。

「だから私、しゅうなちゃんの事、信じてみたいんです。しゅうなちゃんは、苦しただけなんですよ。怖ただけなんですよ。」

「でも、ゆなちゃん、また嫌がらせされたりしたら？」

「それは、はっきり言って怖いです……。でも、少しずつでも、なれていきたいです。」

「俺……、やっぱりまだ許せない。」

しゅうなにどんな理由があったとしても、それと同じ事を他人にしたいわけではない。

そんなの、いいわけないじゃん。

自分と同じ苦しみを人にあじあわせて、そんな簡単に許されるわけないんだ。」

「私もまだ許せません。しゅうなちゃんに殺意をいだいた事も、もちろんありました。」

でも、憎しみは憎しみをうむんです。だから私は憎しみを喜びに変えたいんです。」

いいえ……、きっと変えてみせます。」

「なんで?! なんでゆなちゃんは、そんなふうに笑えるの?! ゆなちゃんの受けた傷は大きいでしょ?

そんな簡単にかたづけられるような傷じゃないでしょ?!

憎しみくらい、持つでしょ?

なのになんで?!」

「かなめさん・・・、かなめさんは変わってしまいました。」

「俺が変わった?

何言ってるの?

俺は強くなったただけだ! あの頃より!

だから、復讐するんだ! あいつに、しゅうなに!」

「・・・、かなめさんは、そんな人じゃないです! 優しくて、いつも守ってくれて、復讐なんてしないで、強くなくて、私に笑いかけなくて、とてもいい人なんです!」

俺は変わらない。

「ゆな・・・ちゃん。」

「かなめさんおかしいです！復讐とか、そんなの絶対おかしいです！」

「ごめん、ごめんゆなちゃん。」

俺がゆなちゃんに触ろうとした瞬間、ゆなちゃんは、俺の手を叩いた。

「触らないで下さい！そんなかなめさん、嫌いです！」

ゆなちゃんは走って行ってしまった。

「ゆなちゃん・・・。」

俺は孤独感に、ただ立ち尽くす事しか出来なかった。
おいかけようとも、出来なかった。

また俺は・・・一人。

かけがえのない人も離れていった。

誰からも相手にされなかった俺を相手にしてくれたのは、ゆなちゃんだけだったのに。

今後悔したって遅い事なのに。

本当に俺はおかしかった。本当の俺は強くない。

ずっと、ずっと、変わらない。

変わらないんだ。

俺はゆなちゃんを探しに行こうと決めた。

ずっと走って、大きな橋を渡った。

すると、ゆなちゃんが見えた。でも、一人じゃない。しゅうなと二人だ。

俺はそっとちかずに、きずかれないように、静かに二人の会話を聞いた。

「話って何よ、ゆな。」

「しゅうなちゃん、今まで苦しかったんですよ。辛かったんですよ。だから、かなめさんを、いじめたりしたんですよ？」

「あんたに何が分かるのよ?! あんた、そんな事言っとうなるかわかってるんでしょね!？」

「私はいんです！大切なのは私じゃないんです！かなめさんなんです！」

真実の言葉。

「かなめ・・・、なんで？なんで、かなめなの！？」

「かなめさんは、傷付いたんです！おかしくなってしまったんです！なんで、かなめさんを傷付けたんですか！？」

「私だって、傷・・・付けたくなかった。死んでほしいなんて思っ
てなかった。」

「じゃあ何でなんですか？！」

「あのまま一緒にいたら、私がおかしくなっていたから！離れなきゃ、おかしくなっていた。十年たって、またかなめと会って、心が変
になった。」

後悔だってした！」

「しゅうなちゃん、かなめさんの事・・・。」

「誰よりも好きだった。一緒にいられたら、どれだけ幸せか・・・。
。」

でも、もう無理。

私を恨んでるのはもちろんだし、かなめの心は、ゆなにいつてる。
だから、かなめが、ゆなを守るって言ったとき、泣きそうだった。
だから、逃げたの。」

「しゅうなちゃん・・・、私・・・。」

「ゆな、ごめんね。ゆなをいじめたのは、小さい時の恨みを誰かにぶつけたかったの。」

でも、ゆなにリストカットしてわかったの。無駄な事だったって。

私は、逃げてただけだって。」

「でも、一番苦しかったのは、しゅうなちゃんですよ。」

誰からの愛も受けずに、生きてきたから、誰かと、共に生きていき
たかったんですよ。」

「そうかもね。誰かに助けてほしかった。」

暗い穴から、明るい世界に、連れだしてもらいたかった。」

「しゅうなちゃんは、もう明るい世界にいます。」

しゅうなちゃんは、ここにいますよ。」

死にたい。

「でも私は、かなめから、親の優しさを消してしまった。
家族の大事さを、私が奪ってしまったの。
最低だ。」

どこまで私は最低な女なんだ……。」

俺はつい、その会話に入ってしまった。

「そんなの、昔の事だろ！」

「かなめ！」

「俺、しゅうなを誤解してた。前までは、怖がってた。怯えてた。
でも、今は違う……。」

「でも私のしてきた事は変わらない！
私、二人をすごくいじめてた。ゆなにリストカットなんてしなきゃ
よかった。かなめに、死んじゃえなんて言わなければよかった。」

「俺は、もういい！もういいんだ！
過去なんて、いらない！過去を捨てたってかまわない！
俺は、今を大切にしたいんだ！」

「そうですよ。しゅうなちゃんが、【今】変わろうとすれば、過去なんていらないますよ。」

「私・・・変われるの・・・かな。」

みんなにつぐなう事、できるのかな。」

「ああ、きっとできる。」

「信じてください。自分を、そして、私達を。」

「やっぱりできない！私には、できないんだよ！

できない、できない、できない、できない、できないんだよおお！

死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい、死にたい！

死んだ方がいい！

これが私のつぐないかたなの！

私は死ぬのよ！」

「俺も、最初はそう思った。しゅうなに死んでほしいって。でも！死んで、何のつぐないになるんだ？」

「えっ・・・、それは・・・。」

「俺は、死んでもらうより、罪をつぐなってほしい。」

本当に居ていい場所。

「死ぬ事で、つぐないになる！私のつぐないは死ぬ事！それぐらいの罰を受けるのが、当然なの！」

「なぜですか？なぜ、あなたはそこまで死を選ぶ選択をするんですか？」

「しょうがないの！これしか出来ないの！最初は罪をつぐなえるのなら、すべて失ってもいいと思った！でも、それだけじゃ、たりないの・・・、すべて失うことだけじゃ、少なすぎるの！」

「何が少ないんだ？つぐないが？
なら、そんなのしなくていい。」

「でも！居場所も、お金も、ない私には何も出来ないの！もし、お金があったら全部あげてた！私に居場所があったら、その居場所をゆなとかなめにゆずってた。でも、私は何も無い・・・。」

「なに言ってるの？居場所、あるじゃん。
ちゃんと、しゅうなの居場所、ここにあるじゃん。」

「えっ？何言ってるの？！私の居場所はどこにも・・・。」

「だから、ここにあるよ。居場所がないなら、つくればいい。必死に、はいつくばってでもつくればいい。でもさ、しゅうなはここに居場所があるから。ずっと、しゅうなの居場所になるから。どこにも行かない。俺とゆなちゃんとしゅうなの居場所。」

「うつつ、あったかい。こんなに居場所があるってあったかいんだ。」

「・・・、私、ここにいてもいいのかな・・・。」

「当然です！しゅうなちゃんも、私達の居場所ですから。」

「あったかい。あったかいよお。すごく、すごくあったかいよおお。」

俺達の居場所（前書き）

今まで読んでくれた方々、ありがとうございました。最後に皆さんの居場所はどこですか？

俺達の居場所

「これが、本当の愛なんだね。」

「あったかたって気持ちいいよな？俺も、居場所が出来た時、しゅうなと同じ気持ちになれたんだ。・・・ああ、俺にも大切な人が出来たんだなあ、って思ってたんだ。」

「私にも大切な人、出来たよ。私の居場所になってくれる人で、私も居場所になってあげる人、二人。」

「うん。しゅうな、ゆなちゃん、どんなときも、三人でいよう。どこにも・・・行かないから。」

「はい！」

「うん！」

俺には、居場所が出来た。どこにもないと思った居場所があった。

俺の居場所は、あの二人の所。

家族には、居場所はない。

だからあのあと、わけを一応話して、俺は家を出た。

三人で暮らそうと誓った日にちかづくために。

これは、奇跡か？運命か？

いや、ゆなちゃんの救いの神様のイタズラかもしれない。

さよならあの日の俺、はじめましてこれからの俺。

神様・・・居場所をありがとう。

俺ならもう大丈夫。

怖くないよ。

悲しくないよ。

苦しくないよ。

俺に居場所があるから。必要としてくれる人がいるから。

こんなに俺は幸せだから、もうくじけたりしない。

「かなめ！何言ってるの？空に向かって。」

「かなめさん、本当に不思議ですよ？」

「そんなの、決まってるじゃん。
神様にお祈りだよ。」

【俺の居場所はどこにある】

これからも、ずっと。

（終わり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6832f/>

俺の居場所

2010年12月5日11時30分発行